■No. 161号
OB・Gニュース
二〇二〇年九月号
発行責任者
社民党がんばれOB・G福島の会
eメール huruya.michitatsu@orange.plala.or.jp

ひたひたと 軍靴の音と 再稼働

伊東　功（本宮市）

【寄稿】

許せない・安倍専制政治!!

敗戦75年を迎えて〝何か寄稿を〟と依頼された。本来なら、今日の日米同盟の名のもと軍事強国をめざし、一層進行する格差社会はなりゆきまかせ。そしてコロナ渦中、統治機能さえを失いつつある安倍専制政治といかに闘うべきかなどの私の所信をと思ったが老廃の身、それならばすでに読者諸氏の解するところ、的外れの駄文で紙面をついやすことをお許し願うことにした。

「社会新報7月15日号を読んで」

佐高　信氏の「視点」を引用したい。浅沼元委員長に対する河上元委員長の追悼文は、今日の社民党員への激とも読み取れる。「―社会党の次世代の人たちが―日本の独立と平和のために奮闘することを切望してやまない―」と記している。

「吉田首相の〝バカヤロー〟暴言（2月18日）

浅沼演説と国会解散（3月14日）

この機会に、一つの引用の紹介をしたい。それは、「わが言論闘争録」（浅沼稲次郎著・昭和28年版）から、昭和28年3月1日、吉田内閣不信任決議案賛成演説の一部分である。

「―第五点は、吉田内閣の憲法の精神の蹂躙、國会軽視の事実を指摘してその退陣を要求する。吉田内閣が、警察予備隊を保安隊に切り替え、その装備を充実しつつあることは、憲法九条違反の疑い十分なることは何人も認めるところである。自衛隊の漸増計画に名をかりて、あえて憲法の規定を無視し、事実上再軍備をやっているのです。一国の総理が憲法を勝手に解釈し、無視するごときは、まさに専制政治家の態度と言うべきであります」と主張し、続けて「―憲法は、国民活動の源泉であり、その基準であります。民主日本に対する反逆者と言っても、私は過ぎたる言葉でないと存じるものであります」と主張。

この主張は、今日と、当時とは内外情勢は大きく変わっているとはいえ、安倍内閣・安倍首相糾弾の主張と言っても差し支えない。

「こんな日本のままでいいのか」

今、日本ではミサイル防衛システムのあり方をめぐり、敵基地攻撃能力をどうするかなど、自民党内での危険な動きが高まっている。世界唯一の被爆国でありながら、「核禁止条約批准」を見送る様子でさえある。

私たちは、近年語る」とさえ薄くなった「積極的平和」への道をどう高めるべきか。そして「格差なき社会」こそ、平和への確実な道であることを貫くべきだと思う。

安倍専制政治打倒への年として、どう動き出すべきか、それが問われている75年目の年である。

2020年8月

元衆議院議員
現社民党福島県連顧問
佐藤　恒晴

【余禄】

◆一九四一年十二月一日、御前会議で対米・英、開戦開始を決定。
◆同年十二月八日未明、日本軍マレー半島に上陸。
◆同年十二月八日・日本軍真珠湾攻撃を強行。
◆以後、四年間の戦争で300万人の同胞が犠牲。
◆三月十日・東京大空襲・死傷者十二万人余。
◆名古屋・大阪・神戸と相次いで大空襲。
◆六月二十三日沖縄全滅（犠牲二〇万人余）。
◆七月二十六日、米国などによるポツダム宣言が発表。
◆七月二十八日、鈴木内閣これを黙殺。戦争邁進の談話発表。
◆八月六日・広島。八月九日・長崎に原爆投下。（犠牲二〇数万人余）
◆八月十四日・スイス政府を通じ、連合国に「ポツダム宣言受託を通知」
◆八月十五日・昭和天皇「ポツダム宣言受諾の詔書」全国放送。
◆九月二日・ミズリー号甲板上で降伏文書調印。

【視点】

政治の構図が変わりつつある
「地方分権の時代へ」!!

「新型コロナ・ウイルス」の感染が拡大してから、この間、政治の構図が変わりつつある。今までは中央政治の号令一下、中央官庁の指示に従って全国一律に動いて来た地方政治が、その本来の「自治」の姿を取り戻し、感染の実態や地方の実情を踏まえた独自の動きを見せ始めたことにある。

◆2月28日、当時感染者が66人と全国最多となった北海道の鈴木知事は、全国に先駆けて独自の緊急事態宣言を出し、道民に週末外出自粛を呼びかけた。和歌山県済生会有田病院で発生した医師と患者の初感染が確認されたとき、県は陽性患者を、別の病院に移送して隔離をして医師や患者、出入りの業者470人余全員にPCR検査を実施し陰性を確認したのち病院を再開をした。当時の検査対象者は「中国への渡航歴のある者、及びその濃厚接触者に限られていた。さらに「体温37.5度以上・4日間」という国の方針を公然と無視し、かかりつけ医への受診やPCR検査の積極的実施を進めてきたのが仁坂知事であった。◆社民党出身の保坂世田谷区長がいる。世田谷独自でPCR検査実績を一桁上げて、「いつでも・誰でも・何度でも検査を受ける体制」をつくっている。

（「ニュースを読んで」を参照）

國と地方の政治の差が浮き彫りになった

以来、各自治体における「検査体制の強化・充実」、「発熱外来の開設と『相談センター』を介さないPCR検査の実施」が今や当たり前の実態が顕著になっている。そこには、知事をはじめとした自治体の首長が先頭に立って発信をし、積極的に公開をするといった共通点が上げられる。

まさに、今回ほど「国と地方の政治」の差が浮き彫りになったことはない。つまり、首長が大きな権力を有するのは、住民から直接選ばれる、地域の実情を把握し、かつ住民に対し直接的責任を負うことになるからである。「見える化の政治」の実現である。

OB・Gニュースでも取り上げてきた「地方分権の時代」になったことを意味する。

野党共闘を「地方分権政治」の実現から考える

現在、自・公政権に対峙するため「野党共闘」と「合流問題」が政治の課題となっている。社民党はどう対応するのか。OB・Gの会は「社民党の強化に向けた高齢者応援団」として結成された。よってこの問題には無関心ではいられない。その意味で社民党に期待することは、身近な地方自治体選挙をしっかり取り組み、勝利をして、その力を地域住民に示すことではないだろうか。そのことが「野党共闘」あるいは「合流」で得られるのか、それとも社民党単独の組織力をもって成し遂げられるのか、そのことの具体的道筋を示すことを求めたい。

かつて私たちは「地方から国を変える」を合言葉に地方自治体選挙に取り組んだ。その戦いを通して「地域住民の期待と支持」をバネに国政選挙に臨むことを方針とした。地方自治の戦いを放棄、あるいは勝利をせずに「国政選挙」は戦えない。今が、その時ではないだろうか。

そのためにも「野党合流問題」をどうするのか、社民党を支持し、期待をもつ住民の思いを第一に考えて欲しいと希望する。

人から人へ・全国的な広がりの中で

「コロナ禍」は、9年前の福島原発の水素爆発による「放射能汚染」をめぐる記憶と結びつく。

当時も「放射能に『色と臭い』があれば」ということが市民の間で言われた。そして「町中・網の目の放射能検査」を求め、「放射能の高いところから『距離』をとる」ということを知った。その意味では、今般のコロナ禍と通じるものがある。

そこで今、「3密」を避ける生活習慣が提起されている。しかし、この「安全な距離・2メートル」が安心なものであるかについて立証されないケースが次から次へと生まれている。つまり、その距離をとり続けたとはいえある者は「陽性」、ある者は「陰性」という検査結果が生まれる。さらに「無症状」という実態が、「ウイルス」が体内に入っているにもかかわらず知らないまま通常の生活を続けることにも通じる。しかも若者の行動範囲は広い。結果して感染が高齢者への感染に及び、重篤、あるいは死亡に結び付くという危険が拡大している。

しかも「治療薬がない」。「予防ワクチン」の見通しもたたない。そこに「迷いと不安」が拡大する。

また「人から人への感染は地域を限定しない。そ

して全国へ」と広がる。まさに厄介なものである。

そして政府が実施した「GO TOキャンペーン」の翌日、「5000人の島・コロナ緊張。院内感染に住民の心配」、「来島自粛呼び掛け」という鹿児島・与論町の声となり、さらに「絶対に帰るな―」と都会に出た子どもの帰省に父が応えるとう言葉の記事が反響を呼び、に、その投稿が反響を呼び、4万回以上のツイートがあったという。

（7月24日・毎日新聞）

そして「失政」とも言うべきこれらの危機に、国の責任者、安倍首相の姿は国会の「閉会審査」の場にも、国民の前にも見せることがない。国民は、もっともっと怒るべきである。

コロナが生み出す世代間の断絶

「若者が街に出るからまた感染者が増える」と報じたら、若者たちはそれを素直に受け入れているのだろうか。折しも7月10日の毎日新聞ニースメールに次の記事が載っていた。

「緊急事態宣言の中、閑散としたファミリーレストランで高齢の夫婦やグループが昼間にビールを飲んでいるのを何度か目にしたことがある。自粛生活のストレスを発散しているのだということが会話の端々から聞こえてきた。私は少し胸がざわついた。給仕をする若いウエーターの視線が気になったからである。感染の恐れがあっても仕事をしなければ生活できない。店が閉まれば仕事を失う。そんな若者たちにとって、働かなくても自宅で過ごす余裕があるのに、レストランでビールを飲んでいる高齢者に、若者の目はどう映るのだろうか」。

グローバル化や少子高齢化が進展していくなかで、社会の分断はコロナ・ウイルスの拡大によってさらに顕在化した。経済格差だけでない。家族や地域のつながりもなくなり、政府や権威への不信感は募る。そして世代間の断裂が強まる。

次のような記事も記憶をしている。学校、保育所、幼稚園の休校・休園にあたり、休業をやむなくした母親が、近くの公園の広場でゲート・ボールを楽しむ高齢者の姿に、「心良しとしないつぶやき」を口にした。それは事業主からの休業手当が支給されないばかりか、この際だから辞めてもらうと言われ、不安を抱えた状態にあったその母親にとって、ゲート・ボールを楽しむ笑い声に耳にしたときの想いのつぶやきであった。

（文責・降矢）

【ニュースを読んで】

■コロナ騒動大変な世の中です。先日車の免許更新を無事終了し「認知症検査」も何とかクリア出来、3年間車の運転が出来ます。まだ返上は出来そうにありませんが事故無く過ごしたいと思っています。コロナ、政治等の問題が山積していますが、早く終息する事を祈念し、コロナに負けない健康を維持したいと思っています。

■早やコロナ騒動の中お盆を迎えようとしています。今日はOB・Gの役員会がありました。秋の解散総選挙を睨んでのものとなるでしょう。会員は150名体制になりましたが、全国の仲間と連帯して頑張ります。夏バテをしないように。

■ニュースを拝読して我が意を得たりです。河井夫妻はいまだに議員でボーナスも全額手にします。かたや、コロナ禍で派遣切りにあい、路上生活者が増えていますし、私たちもいつになったら以前のように各地に出かけることができるか、全く見通しがつきません。都知事も、政府も、なんら手を打たず感染が増えるにまかせていて悲しいです。

■メールに書かれていることに、思わず何度もうなずきながら読んだ次第です。同感！！今後、県内でも感染者はおそらく出るでしょう。その拡がり具合によっては、総会も「書面総会」という形式を取らなくてはいけないのでは・・・と思っていましたが、諸先輩方の熱い思いにより、感染症対策を行っての総会開催となりました。その思いに耐えうるように準備していきたいと考えています。

■第一波か第二波かはともかく、コロナは収束するどころか、さらに感染が拡大していくことは間違いないでしょう。この期に及んでの政府の不作為にはあきれるばかりです。緊急事態宣言を発した4月と今は何が違うのか、この事態に対して国はいかなる対策をとるのか、国民に丁寧に説明する必要がありますが、安倍晋三は「おこもり状態」です。―中略―社民党出身の保坂展人世田谷区長は、世田谷区独自でPCR検査数を一桁上げ、「いつでも、だれでも、何度でも」PCR検査を受けられる体制を作ると言っています。自ら実践することによって政府に風穴を開けることも大事ですね。

■今月も沢山の読者の「こえ」が掲載されていて、

大変逞しく感じ、俺もボーッとしている場合ではないと励まされるというか、尻叩きにあったようです。嬉しいやら、寂しいやら・・・。10月の党大会で〝合流〟の件を決めるようですが、果たしてどうなるのでしょう。社会党から社民党へ、そして今日までの総括抜きですか。

■毎月のOB・Gニュース届くたびに一気に読み切ります。それにしても戦後最悪の安倍政権です。野党も頼りない限りです。わが党も団結を強めて頑張らなければ。私も傘寿を迎え、目、足の衰えも進んでいます。新報配布もOB・Gの運動もきちんとバトンタッチをする時期と考えています。

■河井代議士に対する政党助成金の使われ方の不透明さに対する鋭い率直な追及が、光っていて、読み応えがありました。最近のメディアに感じるのは、この追及のような根底の怒りが感じられないことです。―中略― 昔、朝日ジャーナルの座談会で、日本の戦後民主主義のことを、ある人が「デモクラシーが根づいたのではなく、『でも、暮らしいい』という現状肯定だ」と指摘した人がいて、なるほど、それは言い得て妙だと納得した覚えがあります。

今回もニュースの中で、「主権・人権・平和主義剥奪との戦い」が大切と言っておられる人がいましたが、私もそれを実感しています。憲法9条が守られていれば、それでいい、ということではありません。主権がないがしろにされ、人権が無視され、憲法9条を迂回する形で軍国化していく現状に目を向けなければ、「民主主義」という体裁は維持したままで強権的な政府が憲法条項を恣意的に解釈し、専横をほしいままにするということが起こります。安倍政権がこの7年間やってきたことは、「民主主義の形骸化」というその一言につきるのではないでしょうか。

コロナは完全に東京で市中感染が拡大してしまい、それを政府の無策、無作為のせいで全国に広めてしまったように見えます。そしてコロナ差別、コロナいじめと言われるような心無い言動の報道が後を絶ちません。―中略―コロナの感染が感染者に責任がある(悪い)と思うか、どうかの意識調査の結果を目にしました。国別にみると、日本が11％強で突出した割合だとのことでした。いつ、どこで、誰が感染してしまうか分からない状態で、感染者が悪いと考える理屈がわかりませんが、1割以上もの人がそう考えるという結果に、この国はなぜこんなに不寛容な社会になっているのだろうと思ってしまいます。政府も東京都も専門家(分科会)も、自らの無為無策には触れずに感染防止は各個人の注意、対策の徹底にかかっていると繰り返し強調します。自粛警察もコロナ差別も、いじめも全く不思議ではありません。―後段省略―

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

シルバー・ヒヤリハット　（二）

◎二番目に多いのが「玄関・階段・廊下」です。

「玄関・階段・廊下」は自宅内での移動の際にはよく使う場所です。この場所における行動でヒヤリハットを経験した高齢者の割合は全体の33.5％と言われています。そのうちほとんどの人が「ケガをした(しそうになった)」と回答している場所は「階段」です。ケガの中身も階段の踏み外しなどによる「転倒事故」がほとんどで、骨折や、ねん挫など高齢者にとっては「寝たきり」になるなど、きわめて危険度の高いケガにつながります。

その事例のひとつに両手で物をもっての上り、下りがあります。「3点支持」とは「安定した状態を保てる状態」を意味します。両手で物を持つことは2点支持で不安定な状態になることです。ましてや「下り」は危険です。必ず「手すり」か「壁」に手を添えて「3点」を確保しましょう。

また若い方は、きちんと片足の「かかと」は下の床についています。しかし、高齢になるに従い、すり足状態が「かかと」を階段の「端」に残すことが多くなります。手すりにつかまっていれば「おっとっと」となりますが、そうでないと、前に転倒、階段を転げ落ちることになります。

階段の次に多いのは玄関の「たたき部分」での転倒事故です。やはり「段差」が高齢者にとって大きな鬼門となっていることが、データからも明白です。

「玄関には手すりを設置しよう」ということは、そのような転倒を予防することになります。